

そして、「煖」を修する「界繫」の問題について、有部の「色界繫」の「六地」説、妙音尊者の「欲界繫」説、あるいは「七地」説という見解が示されている。これらの主張の相違は、論師(学派)の見解の相違であると見てよく、『発智論』の内容と合わないことではない。更に、この主張の相違は、煖の加行としての三慧のプロセスをどこから定義づけるかの見解の違いの問題とみてよい。

なぜなら、『発智論』には「順決択分」の概念がまだ成立されていないからである。「煖善根」が成立した過程は、『大毘婆沙論』における「四諦現観」、「聖道」と結びつきの経過において、見道の直前の段階である「順決択分」が完成されたのである。よって、「煖」法の「色界繫」という定説は理解できるであろう。

一方、「煖」法の「欲界繫」説に関わる「四預流支」は、言葉の通りに預流果に達する条件であるので、「煖」法の出典の意味合いに相応していると分かる。

## 朝鮮初期『儒釈質疑論』に現れた宇宙観

鄭榮植<東京大学博士課程>

1. 序論
2. 本論
  - 1) 釈迦の誕生課程と易の理論
  - 2) 仏教の三身と易の河図・洛書・八卦
  - 3) 時空観の比較
3. 結論

### 1. 序論

韓国で、統一新羅と高麗時代は仏教の全盛期で、社会的な影響力の面で仏教が儒教を圧倒した。このような現実的な優劣と主補的な役割分担の下で、儒仏は相互並立を維持した。しかし、高麗末期になると、相互並立の構図は崩れ初め、朝鮮時代になると、朝廷は遂に崇儒抑仏の政策を採ることになる。その最も大きな原因は、高麗末の性理学の輸入である。性理学者達は高麗末の仏教教団の腐敗を非難すると同時に、仏教教理そのものを非難するに至る。代表的な人が鄭道伝(1342~1398)で、彼は「心気理篇」「心問天答」「仏氏雜弁」等で、仏教教理を全面的に非難する。このような排仏論に対して、仏教では省敏が何百人の僧徒たちと共に朝廷に訴え、尚稔は仏教教団の改革を自ら提案するなど、排仏論に反発した。しかし、まだ、仏教教理に対する性理学者達の批判に論理的に応答できる能力は備えていなかった。

排仏論に対して最初に理論的に対応したのは、訓虚得通己和(1376~1433)の

『頭正論』と、本論文で取り扱う『儒積質疑論』である。『儒積質疑論』の作者については、己和の作だという見解もあるが、まだ確定されていない<sup>1</sup>。現存する最初の刊本は、興徳県逍遙山烟起寺刊本(1537年開刊、『韓国仏教全書』巻7所収)である。故に、少なくとも1537年以前の開版と思われる。『儒積質疑論』は対話の形式になっており、儒者の仏教批判に対して著者が応答、又は擁護する内容で構成されている。

中国における道家や儒家による仏教批判は遠く北魏から始まるものであるが、その内容は大きく三つに分けられる。一つ目は、仏教教団の腐敗に対する批判。二つ目は、仏教の反人倫性に対する批判(削髮出家など)。三つ目は、仏教の思想、哲学に対する批判である。1、2の内容は時代と地域にかかわらず大同小異であり、それは韓国においても同じである。『儒積質疑論』の特徴は三つ目の批判に対する応答から見つけることが出来る。特に『儒積質疑論』では易の河図・洛書の原理を以て、儒仏の相通性乃至は仏教の優越性を主張する内容が多い。本論文は『儒積質疑論』に現れている儒仏観の中で、特に宇宙論について考察しようとする。

## 2. 本論

### 1) 釈迦の誕生課程と易の理論

儒仏の宇宙論を比較することにおいて、まず儒者は次のように尋ねている。

此中国聖人之教、莫先於図書、而仏者不及論。以是而劣之、豈非然乎？

＜中国の聖人の教えは河図、洛書より優先するものはないが、仏者はそれについて論じていない。故に、仏教を下劣に扱うのがどうして間違っているだろうか。＞

河図とは、上古時代(約5～6千年前)に河水で竜馬が出現した時、竜馬の背中

<sup>1</sup> 故に、本論文では「著者」と呼ぶことにする。

<sup>2</sup> 『韓国仏教全書』巻7、p 256 下

の模様から得た絵であるが、伏羲氏がその模様を見て宇宙三羅万象の理致を悟り、八卦を描いてから世界に知られた。又、洛書とは、夏禹氏が洛水で神龜の背中絵を見て、理致を覚り治水に成功することによって世界に知られたという。もちろんこれは伝説の話で、河図と洛書の絵自体は宋代の邵雍(1011-1077)によって伝わったもので、朱子(1130-1210)は『易学啓蒙』『易本義』などでこの図を重視した。恐らく、『儒積質疑論』の質問者である儒者も朱子の性理学に現れた河図、洛書に基づいて質問しているだろう。

このような儒者の質問に対して、著者はまず釈迦の入胎と誕生課程が易の理致に付合していることを見せて、儒仏の相通性を主張している。まず、著者は釈迦が摩耶夫人の胎に入る課程を、次のように述べる。

原夫法王之応世也、体則太極、用則乾坤。運用施為、自与天地流行、一事一相無有不合於造化者。上生九天之上者、莊周所謂大明之上、至陽之源也。動之於子夜者、天開於子之応也。処胎以癸丑者、地闢於丑之応也。誕生於甲寅者、人生於寅之応也。入胎以七月者、陰陽氣適之時也、父母氣均而後胎也。取其十五者、陽白陰黒之間也。又五者、土之生数、坤以蔵之之応也<sup>3</sup>。

＜そもそも、法王が世界に応じるには、体は太極であり、用は乾坤である。運用して天地と共に流行し、一事一相が造化に合しない時がない。(釈迦が)九天の上に上生したのは、莊子の所謂「大明の上、至陽の源」と言ったのがそれである。子夜に動いたのは、「天は子に開く」と言う理致に応じたものである。癸丑年に入胎したのは、「地は丑に開く」と言う理致に応じたものである。甲寅年に誕生したのは、「人は寅に生まれる」と言う理致に応じたものである。七月に入胎したのは、(七月は)陰陽の気が適切な時期であり、父母の気が均等になった後、入胎したのである。15日を選んだのは、陽白陰黒の中間だからである。又、5は土の生数で、地に植える理致に応じたものである。＞

これは釈迦の入胎課程を宇宙の生成、変化と陰陽五行理論に適用させて説明したものである。元々、陰陽五行理論を最初に提唱したのは戦国末の鄒衍(紀元前3世紀前半)であったが、漢代に至っては陰陽五行の範疇にすべての現象を対応させ、世界とその変化を解釈しようとした。五行(木・火・土・金・水)は以後いろ

<sup>3</sup> 上掲書、p 260 上



んな範疇に配属されるが、それを図表で表すと、次のようである。

<表 1>

五行	季節	方位	臓	色	八卦	数		十干	十二支
						生数	成数		
木	春	東	肝	青	震・巽	3	8	甲・乙	寅・卯
火	夏	南	心	赤	離	2	7	丙・丁	巳・午
土		中	肺	黄	坤・艮	5	10	戊・己	辰・戌・丑・未
金	秋	西	肺	白	兌・乾	4	9	庚・辛	申・酉
水	冬	北	腎	黒	坎	1	6	壬・癸	亥・子

『儒積質疑論』の引用文で、まず「体則太極、用則乾坤、運用施為、自与天地流行、一事一相無有不合於造化者。」は、釈迦の体を太極に、用を陰陽(乾坤)に喩え、その陰陽が展開して三羅万象を生じることを説明している。このような儒家の宇宙論は元々『周易』「繫辭伝」の「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦也。」から由来するもので、『周易』の宇宙論を大きく展開したのは宋代周濂溪(1017~1073)の『太極図説』である。そこには、宇宙の生成と展開について、次のように言っている。

無極而太極。太極動而生陽、動極而靜。靜而生陰、靜極復動。一動一靜、互為其根、分陰分陽、兩儀立脈。陽變陰合、而生水火木金土。五氣順布、四時行脈……乾道成男、坤道成女。二氣交感、化生万物。万物生生、而變化無窮焉<sup>4</sup>。

<無極でありながら太極である。太極は動いて陽を生じ、動が極まると静まる。静まって陰を生じ、静が極まると又動く。動いたり静まったりして、お互いにその根となり、陰と陽に分けられ、兩儀が出来る。陽が変わり、陰が合わせて、水火木金土の五行を生じる。五気が順調に広がると、四時が運行する。……乾道は男子となり、坤道は女子となる。二気が交感して万物を化生する。万物が生生して、変化が已まない。>

<sup>4</sup>『太極図説』(岩波書店、1986、西晋一郎・小糸夏次郎 訳注 p21

著者はこのような儒家の宇宙論に釈迦の誕生課程を適用させ、釈迦の体(太極)と用(乾坤、陰陽)が展開して、三羅万象が生じ、運行されると主張する。また、「上生九天之上者、莊周所謂大明之上、至陽之源也。」で、「上生九天之上」とは、釈迦が過去世の迦葉仏の時に兜率天宮に上生したのを指すが、易で9は老陽で陽の極数である。故に、莊子が言った「大明之上、至陽之源」<sup>5</sup>と相通すると主張する。次に、「処胎以癸丑者、地闢於丑之応也。誕生於甲寅者、人生於寅之応也。」と「取其十五者、陽白陰黒之間也。又五者、土之生数、坤以蔵之之応也。」は、釈迦の入胎日である「周昭王13年癸丑年、7月15日」と誕生日である「周昭王14年甲寅年、4月8日」を陰陽五行理論に適用させたものである。まず、入胎日が7月15日なのは、7月は陰陽の気が適切な時期だからであり、15の10と5は<表1>から見ると、五行の土、方位の中に当たり、陰と陽の中間に位置する。又、5は土の生数として、地に種を植えることを意味する。又、釈迦の誕生年が甲寅年なのは、十二支の寅は五行の木、季節では春に当たるので、春に万物が生じるように釈迦が誕生したのである。結局、著者の論理によると、釈迦が入胎したのは地に種を植えるのと同じ理致だというのである。

又、著者は「釈迦の誕生課程も陰陽五行理論に背かない」として、次のように言う。

出胎以四月者、陰尽陽極之時。陰尽則胎氣消、陽極則生矣。取其八日者、八者開也。又八者、木之成数。木為震、帝出乎震之応也。奉以金蓮者、処染不染之謂也。九竜吐水、沐浴金軀者、九為陽数、水為陽氣所化、用以洗除陰蔵之氣也<sup>6</sup>。

<四月に出胎したのは、陰が尽き陽が極まった時である。陰が尽きると胎氣がなくなり、陽が極まると、生まれるのである。八日に生まれたのは、八は開くことを意味する。又、八は木の成数である。木は八卦の震卦に当たるが、「帝王は震卦から出る」と言う理致に応じたのである。(生まれた後)金蓮で奉じられたのは、汚いところに住しても染められないことを意味する。九竜が水を吐いて釈迦の軀を沐浴させたのは、九は陽数で、水は陽氣によって変化されるので、それを以て陰蔵の氣を洗い落としたのである。>

<sup>5</sup>『莊子』「外編」在宥第11.

<sup>6</sup>上掲書、p260上

まず、「出胎以四月者、陰尽陽極之時。陰尽則胎氣消、陽極則生矣。」は、釈迦の誕生日が4月8日であるが、4月は八卦の乾卦(☰)に当たるので、陰気はなく陽気しかない。則ち、胎気の陰気が無くなって陽気が極まった時、生まれたのである。また、「取其八日者、八者開也。又八者、木之成数。木為震、帝出乎震之応也。」は、8は木の成数である。河図で3、8は五行の木に当たり、東に位置する。東は万物が動き始める所である。更に、8は震卦に当たるが、震卦は春木を意味する。また、春木は万物が生じ始めるのを意味する。結局、釈迦が8日に生まれたのは『周易』『繫辞伝』の「帝出乎震」に付合することである。

次の、従来仏教で蓮華は泥の中で咲いても自分は汚くならない花として、「涅槃の清浄な境地」を象徴するものとして利用された。特に、法華經のサンスクリット名は Saddharma-puṇḍarika で、仏の妙法(正しい真理の教説)を大白蓮華に喩えたものである。「釈迦が生まれると、地から金蓮が湧き上がって釈迦の軀を奉じた」というのは、1. 釈迦が蓮華から生まれた聖なる人格であるという意味(古代インドの神話から由来)と、2. 蓮華座の二つの意味があると言える。次に、「九竜吐水、沐浴金軀者、九為陽数、水為陽氣所化、用以洗除陰藏之氣也。」は、9は太陽数であり、水は八卦の坎卦に当たるが、坎卦(☵)は外は陰であるが内は陽である。また、金軀の金は河図では西に位置して陰である。故に、陽気で陰気を洗い落とすことを意味する。

これまで著者は釈迦の入胎、誕生課程を陰陽五行理論に適用させ説明したが、それを要約すると、釈迦が摩耶夫人の胎に入るのは太極、入胎から誕生までの10ヶ月は兩儀と五行が生成する時、そして釈迦が生まれてから初めて陰陽五行が運行し始めると言えるだろう。

## 2) 仏教の三身(法身・報身・化身)と易の河図・洛書・八卦

一方、これに対して儒者は再び次のように反論する。

如子之言仏、体則太極、用則乾坤、運動變化、与天地流行則審矣。然則天地造化之

妙旨、莫詳於圖書、而仏之不及論、何也<sup>7</sup>。

＜あなたが「仏の体は太極であり、用は乾坤であり、運動変化して天地と共に流行する」というのはよく分かる。それでは、天地造化の妙旨は図書より詳細なものがないが、釈迦は論じていない。どうしたものか。＞

これに対して、著者は三身と『大乘起信論』の三大及び仏の手印を以て、解明している。

図書之旨、仏之示人尽矣。而人自不察。比猶盲者、而不知日之明也。仏之示現、必具三身、而三身者、法報化也。法身之結手、合左右為一拳、示其体也。易之自無極而太極是也<sup>8</sup>。

＜図書の内容は釈迦が全部人々に示した。しかし、人々がそれを知らないだけである。それは、盲人が太陽の明るさを知らないのと同じである。仏の示現には必ず三身を具えるが、三身は法身・報身・化身である。法身の結手は左右の手を合わせて一つの拳を作るに、体を見せたものである。易で「無極而太極」と言うのがそれである。＞

手印とは「印契」ともいって、元々インドで古来、手の指などの模様で意志や感情を表現する習慣に由来するもので、それが仏像や舞踊などに使われた。特に、密教に至っては、各尊に特定の印相を配当し、行者がそれを結ぶことによってその尊格との身体的同一を達成する「身密行」として重視された。手印を結ぶ方法には、「十八印」「十二合掌」「六種拳」などがあると言う。

上の引用文で、まず「法身之結手、合左右為一拳」というのは「禪定印」とも思われるが、著者はそれが三大の体を見せたもので、儒家の宇宙論の「無極而太極」の状態を見せたものである、と言う。これは『周易』『繫辞伝』の「易有太極」の状態である。それは、まだ何も現れていない空であるが、すべての妙用を含んでいる混沌の状態である。それは宇宙が生成される前の姿である。釈迦が生まれた時、拳を握っていたことも同じ理致である。これを樹に喩えると、種の状態で、まだ樹として現実化されてはいないが、樹になるすべての可

<sup>7</sup> 上掲書、p 261 中

<sup>8</sup> 上掲書、p 261 中



能性を持っている状態である。

次に、報身については次のように説明する。

報身之結手、闢而展左右、示其象也。易之自太初而為太始、自太始而為太素。陰陽已判、四象已分之時也。左為陽右為陰、而四象則肘之二節也。左右合而為四矣<sup>9</sup>。  
 <報身の結手は左右の手を開いて展開したもので、象を見せたものである。易で「太初が太始となり、太始が太素となる」と言うのがそれである。陰陽と四象が既に分かれた時である。左手は陽となり、右手は陰となり、四象は肘の二節である。両手を合わせると四つになるのである。>

報身の代表的な如来は阿弥陀如来であるが、これは阿弥陀如来が両手を開いている姿を形容したものであろう。則ち、両手を開くのは陰陽の生成であり、左手は陽、右手は陰となる。所で、両手を陰陽に配対するのは必ずしも一定してはいないが、たとえば密教では、右手は日(陽)、左手は月(陰)に配対されている。又、著者は「両手の肘が四象となる」と言うが、この四象が形象化されたのが春・夏・秋・冬の四季節である。この時は、一氣が発して浄氣は上に上がり陽となり、濁氣は下へ降りて陰となる。これを樹に喩えると、根は下で絡まり、芽は上へ上がろうとするのと同じである。則ち、宇宙がようやく展開されるが、万物がまだ生成されていない状態で、『周易』「繫辭伝」の「是生兩儀、兩儀生四象」の段階に当たると言える。そして、これは三大の相を見せたことである。

次に、化身に対する説明は次のようである。

化身之結手、左舒右縮、示其用也。舒者陽、而縮者陰也。左手之指、三伸二屈、右手之指、三屈二伸。伸者皆天数、而屈者皆地数也。両手之指、屈伸相錯。以五行生成配之、則左手之小指為天一而生水、無名指為地二而生火、長指為天三而生木、次指為地四而生金、母指為天五而生土、自下而積至于上者也。右手之小指為地六而成水、無名指為天七而成火、以至母指為地十而成土、各以同氣相求也。此仏之所以示五行生成之本也<sup>10</sup>。

<化身の結手は、左手は伸ばし、右手は縮むに、用を見せたものである。伸ばした

<sup>9</sup> 上掲書、p 261 中

<sup>10</sup> 上掲書、p 261 下

のは陽、縮んだのは陰である。左手の指は三つ伸ばし二つ縮み、右手の指は三つ縮み二つ伸ばしている。伸ばしたのは天数であり、縮んだのは地数である。両手の指が、伸ばしたり縮んだりしている。五行の生成を以てそれに対応させると、左手の小指は天一となって水を生じ、無名指は地二となって火を生じ、長指は天三となって木を生じ、次指は地四となって金を生じ、母指は天五となって土を生じ、下から上に至るのである。右手の小指は地六となって水を成し、無名指は天七となって火を成し、母指に至っては地十となって土を成して、同氣をお互いに求めるのである。これは、仏が五行生成の根本を見せたことである。>

まず、「化身の結手は三大の用を見せたもので、その手印が左手の指は三つ伸ばし二つ縮め、右手の指は三つ縮め二つ伸ばしている」という。化身の代表である釈迦如来が両手の二指を縮めて円相を作り、三指を伸ばすのは「轉法輪印」「来迎引摂印」などから見られるが、「右手の指を三つ縮め二つ伸ばす」ものはどんな印なのか、明確ではない。又、「伸ばしたのは天数、縮めたのを地数」と言うが、天数と地数は<表 1>の生数、成数と同じ意味である。故に、「左手の小指は天一となって水を生じる」とは<表 1>で、生数 1 は五行の水に当たるためである。また、「右手の小指は地六となって水を成す」とは成数 6 は五行の水に当たることを意味している。これは、生数 1 に五土を加えると成数 6 となり、生数 2 に五土を加えると成数 7 となることで、1 と 6、2 と 7 は「有合数」と呼んで、これを「同氣をお互いに求める(以同氣相求)」と言う。また、「左手の小指は水を生じ、無名指は火を生じ、長指は木を生じ、次指は金を生じ、母指は土を生じる」ことは、宇宙生成の順序と同じで、則ち、宇宙は最初に水が出来、次に火、木、金、土の順序で出来るのである。

更に、著者は仏の手印を八卦に対応させて、次のように言っている。

以八卦之成象配之、則左手之三屈而合成乾卦、二伸与下屈為震、二伸与中屈為坎、二伸与上屈為艮。此所以乾震坎艮為陽、而象於左手也。右手之三伸合成坤卦、而二屈与下伸為巽、二屈与中伸為離、二屈与上伸為兌。此仏之所以示乾坤卦象之根也<sup>11</sup>。  
 <八卦が象を成すことを以て対応させると、左手の指を三つ曲げたのは乾卦となり、二つ伸ばし下の指を曲げたのは震卦となり、二つ伸ばし中の指を曲げたのは坎卦と

<sup>11</sup> 上掲書、p 261 下



なり、二つ伸ばし上の指を曲げたのは艮卦となる。乾・震・坎・艮卦が陽となったのは、仏の左手を見習ったためである。右手の指を三つ伸ばしたのは坤卦となり、二つは曲げ下の指を伸ばしたのは巽卦となり、二つ曲げ中の指を伸ばしたのは離卦となり、二つ曲げ上の指を伸ばしたのは兌卦となる。これは佛が乾坤卦象の根本を見せたものである。＞

著者は指を曲げるのを陽気に、伸ばすのを陰気に対応させている。従って、左手の指を三つ曲げたのは乾卦(☰)に当たり、二つ伸ばし下の指を曲げたのは震卦(☳)に当たるといふ。更に、乾卦(☰)震卦(☳)坎卦(☵)艮卦(☶)で陽が優勢なのは、陽である左手を見習ったためであるという。このように、著者は「五行と八卦がすべて仏の手印を見習ったものであり、これは宇宙が運行し始まることを意味する。」と言う。『周易』「繫辭伝」の「四象生八卦」に対応されると言える。又、これを樹に喩えると、樹が成長して枝、葉、花と実が出来る理致と同じである。

以上、三身の手印を三大、宇宙の生成過程、樹の成長課程に喩えたが、それを図表化させると、次のようである。

<表 2>

三身	三大	宇宙の生成過程	仏陀の手印	樹の成長過程
法身	体	無極而太極	拳	種子
報身	相	兩儀、四象	左手、右手	本、芽
化身	用	五行、八卦	左指、右指	枝、実

### 3) 時空観の比較

一方、著者は仏教の時空観を易の陰陽の原理に対応させて説明している。仏教の時間は劫を単位とする。劫とはどんな時間の単位を以ても計算できない無限な時間を意味する。その中、現在の劫を「賢劫」と言うが、賢劫には成・住・壞・空の四劫があり、各四劫ごとに更に 20 増減劫がある。この増減劫とは、人

の寿命を挙げて言ったものであるが、則ち、人間の寿命が八万四千歳の時から百年に一歳ずつ減って、人間の寿命が 10 歳になる時間を「一減劫」といい、再び人間の寿命が 10 歳から百年に 1 歳ずつ増えて、八万四千歳になる時間を「一増劫」と言う。このように、仏教の時間観は増減劫を基本にしており、時間は増劫と減劫を繰返しながら流れるものである。ところで、易でもこれと同じように、陰陽の屈伸、往復によって万物が展開されるという。故に、『周易』「繫辭伝」には「天地の氣運がお互いに感応合一し万物が化育され、男女の精気が結合して万物が化生する。(天地續縻、万物化醇、男女構精、万物化生。)」と言う。ここで、天地は陰陽の物理的な表現であり、乾坤は陰陽の象徴的な表現である。陽は万物を生産する原理であり、陰は万物を完成させる原理である。

『儒釈質疑論』で著者は、人間の軀と世界は皆五行の氣をもらって生じた物なので、生成と破壊の運命は同じであるという。故に、「世界においては成・住・壞・空となり、時間においては春・夏・秋・冬となり、人においては生・住・異・滅となって、循環往復して永遠に已むことがない。(在世界為成住壞空、在時為春夏秋冬、在人為生住異滅、循環往復、窮未來際、而無有已賑者也。)」<sup>12</sup>と言う。則ち、自然の理致は循環往復することである。一ヶ月は月が新月からだんだん大きくなって満月となり、満月からだんだん小さくなって晦日となる。劫と月は皆陰陽が運行するもので、大きくは劫となり、小さくは月となる。故に、晦日と満月を合わせて一ヶ月と言ひ、1 増劫と 1 減劫を合わせて 1 劫と言うのである。

又、前で著者は「宇宙の理致が仏の軀の中にすべて具わっている」と言った。古代インドの宇宙観によると、地球の中心には須弥山があり、太陽と月、星がその周りを回っている。須弥山の四方に四つの大陸があり、その中で南方にあるのが人間が住む閻浮提である。

ところで、著者は「仏教の宇宙観と人間の軀の原理が同一である」と主張する。

經言、須弥山出地入地、其量均為八万四千由旬、而分為天地者。若人之腰上腰下、其勢等分、上為陽而下為陰也。須弥山頂上忉利天、帝釈主其中、而日月星辰処居其

<sup>12</sup> 上掲書、p267 中



下者。若人之頭顱、而形質之首、而聰明諸根会居面部也<sup>13</sup>。

＜経に、「須弥山の盛上った地と凹んだ地の量が同じく八万四千由旬であるが、分れて天と地になった。」と言っているのは、人の腰上と腰下がその勢を等分して、上は陽となり下は陰となることと同じである。また、「須弥山の頂上は忉利天であるが、帝釋天がそれを司り、日月星辰はその下に住む」というのは、人の頭が軀の中心であり、目・鼻・耳の諸根が顔に集ることと同じである。＞

則ち、宇宙の構造と人間の身体構造は同じであり、万物は皆気で構成されており、気は動いて已むことがないのである。このような気の運動によって、太陽と月は地球の軌道を回り、同じように人間の目も回るのである。天地万物は陰陽五行を具えていないものがないので、河図と洛書が馬と亀という微物から生じることが出来るのである。

### 3. 結論

儒仏対論で『周易』と仏教を対比して論じたのはもちろん『儒積質疑論』が最初ではない。たとえば、唐代の清涼澄観(738～839)は『大方廣佛華嚴經疏』巻3で、万物は我心から由来することを強調し、外道の主張を無因説と邪因説として大別して、次のように言っている。

從虛空自然生、即是無因。餘皆邪因。此方儒道二教亦不出此……周易云、易有太極、是生兩儀。兩儀生四象、四象生八卦。八卦定吉凶、吉凶生大業者。太極為因、即是邪因。若謂一陰一陽之謂道、即計陰陽變易能生萬物、亦是邪因。若計一為虛無自然、則亦無因。然無因邪因乃成大過。謂自然虛空等生、應常生故。以不知三界由乎我心<sup>14</sup>。

＜虚空から自然が生じるなら、それは無因である。他は全部邪因である。中国の儒教と道教はこれを出ることはできない……『周易』には、「易に太極があり、それが兩儀を生じる。兩儀は四象を生じ、四象は八卦を生じる。八卦は吉凶を決め、吉

凶は大業を生じる。」と言っている。(しかし)太極が因なら、それは邪因である。また、「一陰一陽を道という」と言い、陰陽が変化して万物を生じるというのは、それも邪因である。また、虚無自然を根源とするなら、それは無因である。しかし、無因と邪因は全部間違いである。なぜなら、自然と虚空から生じる物は、常住だからである。故に、三界が我心から由来することを知らないのである。＞

更に、澄観に就いて参究した圭峰宗密(780～841)も、『周易』の『太易五重運轉、乃至太極。太極生兩儀。』と言うのも、只一念の変化に過ぎず、その根源を追求すると、靈知が根本となる<sup>15</sup>と主張する。このように、唐代の儒仏対論の中では、仏教の優越性を主張する場合が多かった。

しかし、宋代に入っては、性理学の台頭により仏教は劣勢に陥り、遂に仏教の哲学を受け入れて理論的に武装した性理学者達は却って仏教を非難し始める。代表的な排仏論者には、欧陽修(1007～1072)、程明道(1032～1085)、程伊川(1033～1107)等がいるが、これらを体系化し、集大成したのは朱子(1130～1210)である。彼らの排仏論は唐代に比べると、もっと理論的に緻密なもので、故に排仏論に対する反論も厳密でなければならなかった。また、劣勢だった仏教は仏教優越論より儒仏一致論、儒仏相通論を主に主張することになる。その代表的な人々の中の一人が李綱である。彼は『梁谿集』の中で、華嚴と易の理致が同じであることを、次のように主張している。

易之立象以盡意、華嚴之託事以表法。則所謂、一塵含法界而含容無量者、乃存乎其中。二書立象表法以示人、正為此事。恐不當析而為二也。華嚴法界不可窮、而易斷自乾坤以下、本無二理。世間出世間亦無二道<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> 然所稟之氣、展轉推本、即混之一元氣也。所起之心、展轉窮源、即眞一之靈心也。究實言之、心外的無別法。元氣亦從心之所變、屬前轉識所現之境、是阿頼耶相分所攝。從初一念業相、分爲心境之二。心既從細至麤、展轉妄計乃至造業。(如前敘列。)境亦從微至著、展轉變起乃至天地。(即彼始自太易五重運轉乃至太極。太極生兩儀。彼說自然大道、如此說眞性、其實但是一念能變見分。彼云元氣、如此一念初動、其實但是境界之相。)(『原人論』、大正45、710c)

<sup>16</sup> 四庫全書、集部、別集類、梁谿集卷一百十三、雷陽與吳元中書

<sup>13</sup> 上掲書、p271中

<sup>14</sup> 大正35、521b

＜易は象を立てて意を尽くし、華嚴は事に託して法を表す。所謂、「一塵が法界を含み、含容するのが無量である。」というのはその中にある。二書が象を立て、法を表して人に見せようとするのは、まさにこのためである。それを分けて二つにしてはいけない。華嚴の「法界不可窮」と易の「自乾坤以下」は元々一つの理である。世間と出世間も元々一つの道である。＞

朝鮮時代の排仏論が中国、特に朱子の排仏論に大きく影響されていることは言うまでもない。しかし、排仏論に対して反論した文献は数少ない。その原因は中国より朝鮮時代の仏教がもっと厳しい状況にあり、反論する余裕も力量もなかったためであろう。その数少ない文献の中で一つが『儒釈質疑論』である。

『儒釈質疑論』は同じ時代の『頭正論』に比べ非常に理論的で、哲学的な文献である。特に、釈迦の入胎、誕生課程と仏の手印を『周易』に対応させて論じたのはあまり例を見ない所である。

## 初期大乘仏教の三昧思想

朴一黙<駒澤大学博士課程>

1. はじめに
2. 三昧・禅・止観
3. 般舟三昧
4. 首楞嚴三昧
5. まとめ
- \* 略号一覧

### 1. はじめに

三昧は仏教興起以前から、広くインド一般の宗教における伝統的な実践法であるのみならず、仏教においても実践の中心となる必須の実践徳目であった。その起源らしきものが、古くインド原住民の中にみられ、インダス文明の遺跡の一つ、モヘンジョダロの出土品中から三昧をかたどった印章が発見されている<sup>1</sup>。

ブッダは六年間の苦行や三昧の実践をし、ある時菩提樹下で正覚を成就し、七日間、三昧に入って解脱の喜びを感受した後、その三昧から出て、縁起の法を観じた。そのとき、彼は「実に熱心に禅をなすバラモンに、ダンマが頭わになるとき、そのとき、彼は縁起の法を了知するが故に、一切の疑惑が消え去る」という目覚めの詩をとねたと伝えられる<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 田上太秀[1980]『禅の思想』東京書籍, pp.15-19.

<sup>2</sup> Ud, I, p.1.